



平成27年10月7日
京都市立桂坂小学校
校長 林 正幸

前期 特別号

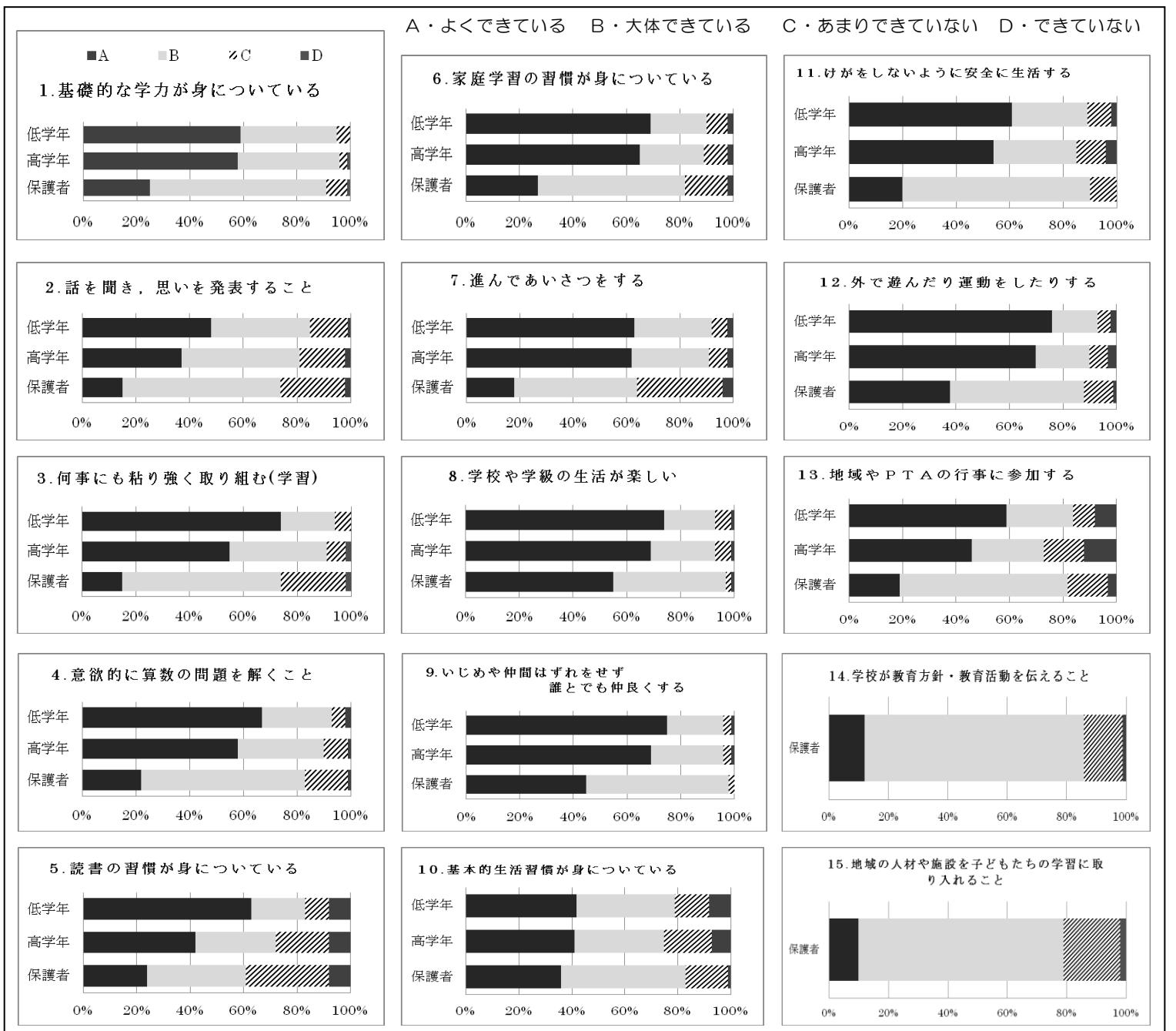


お忙しい中、学校評価のアンケートにご協力いただきありがとうございました。このアンケートは、子どもたちや保護者、地域の方々の一人一人の声を大切にすると共に、共通認識のもと連携して取組をすすめ、子どもたちの学校生活をよりよいものにすることを目指しています。



Email:katsurazaka-s@edu.city.kyoto.jp

学校生活について(ふりかえり)アンケート結果 【前期】【児童・保護者アンケートより】



【児童・保護者アンケート結果の考察】

「1. 基礎的な学力が身についている」「4. 意欲的に算数の問題を解くことができる」については、算数を研究教科として継続的に取り組んだことにより、一定の成果が見られたと感じています。特に低学年では学年で「ノート指導」に重点をおいて取り組んできた成果が表れていると思われます。また学年が進むにつれて自分の思いや考えを発表する子が減っていく傾向があるので、高学年でも授業の中で一人一人が自分の思いや考えを伝え、交流することで活躍できる場を設定していきたいと思います。

「5. 読書の習慣が身についている」においては一番低い評価が見られました。ただし、低学年において80%以上の児童が「できている」と回答しています。低学年においては「朝読書」に重点をおいて取り組んできたり、2年生の教室前に図書コーナーを設置して図書に親しみやすいようにしたりした成果ではないかと考えられます。中学年や高学年の児童も朝読書や図書室での様子を見ると、集中して読書に取り組めている児童が多いので、その様子を保護者の方に伝えていくとともに放課後や家庭でも進んで読書に取り組めるように働きかけていきたいと思います。また、教育後援会の方々から読書本を頂いたり「選書会」で自分の読みたい本を選んだりして本の数も増やしています。また、図書支援員や図書ボランティアの方々に協力していただきながら読書環境の充実にも取り組んでいます。今後もこのような取組を続けていきたいと考えています。

「7. 進んであいさつをする」については学校・保護者・地域ともに重要課題であると考え、「声かけ運動」の期間を長くしたり、児童会も参加したりして取り組んでいます。校内では挨拶をする子が増えてきたという意見もありますが、地域では挨拶が出来ていないようです。自由記述に書かれているご意見にも「旗当番をしていて子どもたちがあいさつをしない」という内容が複数ありました。学校全体や各学級で指導をしていますが、今後も児童に積極的なあいさつを推奨していくとともに、学級全体で気持ちの良い挨拶ができる集団作りをめざしていきたいと思います。

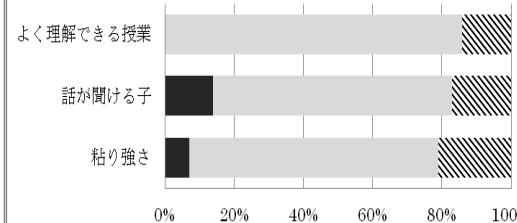
「8. 学校や学級の生活が楽しい」についてはどの学年も工夫して学級経営に取り組んできた成果が見られています。「いいところみつけ」「みんな遊び」「係活動」等で友達との関わりを深めるとともに、時間や約束を守る等の規範意識を高めるための取組が、安心して楽しい学校生活を送ることにつながっていると思われます。今後も学年の発達段階に応じて、学習や活動内容を工夫して取り組んでいきたいと思います。

教職員アンケートより

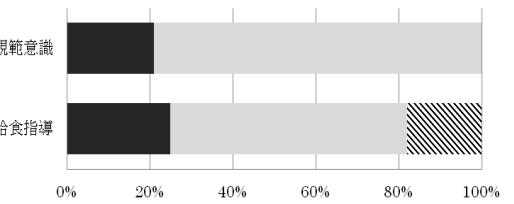
A・よくできている B・大体できている
C・あまりできていない D・できていない

■A ■B ■C ■D

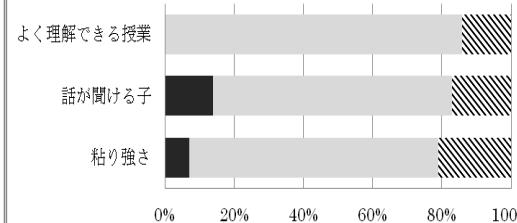
「豊かな心」について



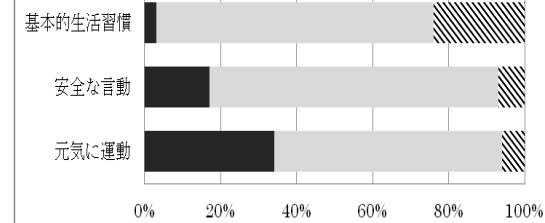
生活指導について



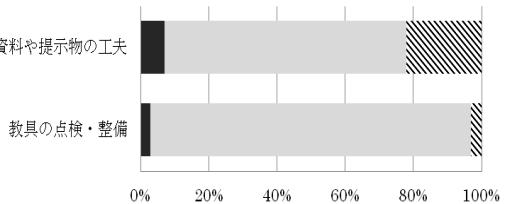
「確かな学力」について①



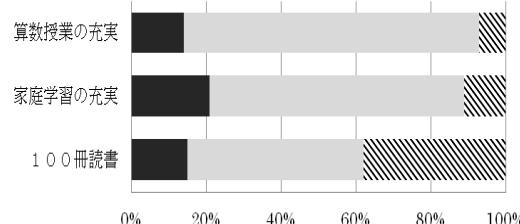
「健やかな体」について



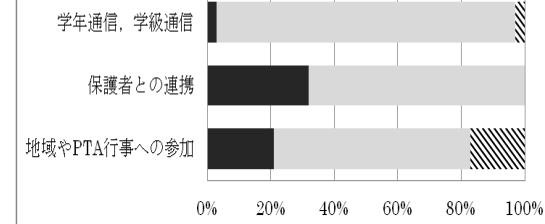
教材・教具について



「確かな学力」について②



地域や家庭との連携について



【今後の改善に向けて】

学習全般において全体的に低学年より高学年の数値が低くなっていることから、学年が進むにつれて学習の内容が難しくなり学習量も増えていくことで、学力の個人差も大きくなり、意欲や粘り強さの低下につながっているのではないかと考えられます。個々の課題をしっかり把握し、全学年においてすべての児童が意欲的に学習に取り組めるように授業改善に努めたいと思います。また学習全般において児童よりも保護者の方の評価が低いという結果から、学校で学習に取り組んでいる姿勢が家庭学習では見られていないと考えられます。家庭でもしっかり学習に取り組めるように保護者の方と連携をとりながら子ども達に働きかけていきたいと思います。

あいさつについては、保護者の方よりも児童の評価が低くないことから、挨拶が出来ていない子どもたち自身は「自分はできている」と思っていて問題意識があまりないのではないかと思われます。理想とされる挨拶の仕方を明確にし、いつでも、どこでも、誰に対してもしっかり挨拶ができるように引き続き学校全体や各学級で指導していきたいと思います。

基本的な生活習慣の項目で、低学年も高学年も「できていない」と回答した児童が20%以上もいました。基本的生活習慣の定着は、学校生活の充実や学力向上のために必要ですので、児童に指導するとともに保護者の方と連携を図りながら生活習慣の改善に努めたいと考えています。

9月28日（月）第2回学校運営協議会

（PKF：プロジェクト・カツラザカ・フォレスト）より

「保護者・児童・教職員アンケート」の結果を受けて、学校運営協議会（PKF）で話し合いを行いました。

まず、全体的に見て児童と保護者の評価の開きが大きいことについてご意見を伺いました。一つ一つの質問項目に対して評価基準が明確ではなく、保護者も児童も各自の主観的な判断で回答した結果が差になっているのではないかというご意見でした。児童は「自分はこれだけ頑張っている」と比較的甘く評価をし、保護者は「もっと出来るようになってほしい」と厳しい評価をしているのではないかと考えられます。「これができていたら『よくできる』」「これができていなかったら『できていない』」という評価基準を児童にも保護者にも共通理解してからアンケートを行えば評価の開きも少なくなるのではないかというご意見をいただきました。特に家庭学習の評価については、学校の宿題をきちんとすれば『よくできる』なのかな、宿題だけでなくさらに自主的に学習に取り組む姿が『よくできる』なのかな保護者の方の考え方もそれ違いがあると思われるので、学年の発達段階に応じた評価基準を明確にしていくことも考えていきたいと思います。

また、学校生活においては仲間との関わりを大切にしたいとのご意見をいただきました。低学年では係活動や当番活動等において、高学年では児童会活動や委員会活動等において友だちと一緒に活動することを通して、他者とより良い関わりができるようにしていきたと話しました。本校の研究主題にも「協同的な学びにより、共に高まり合う集団の育成」と掲げて取り組んでいますので、アンケート項目として「友だちとのよりよい関わり」を取り入れ、児童や保護者に評価してもらうことも今後検討していきたいと思います。

「9. いじめや仲間はずれをせず誰とでも仲良くする」の項目では、児童も保護者も「出来ている」という評価が多いのは良いことであるが、社会的にも「いじめ」の問題は深刻であり、今後地域として何ができるかも考えていきたいというご意見もいただきました。学校ではもちろん「いじめ」の前兆に対して早期発見し素早く対応することで未然に防ぐよう取り組んでいます。地域としても登下校や公園等の遊びの中で気になる場面を見かけたら積極的に声かけ等をしていくことで大きな問題になるのを防ぐことができるのではないかというご意見をいただきました。地域の大人が連携して子どもたちを見守っていくとともに、学校運営協議会をはじめ、PTA・地域も含めたチームで学校運営を進めていくことが大事であると共通認識しました。